

手紙の歌、メールの歌

水上 芙季

二〇二一年十一月七日、NHKの「日曜美術館」で正倉院展（奈良国立博物館で二〇二一年十月三十日～十一月十五日に開催）を放送していた。番組では正倉院文書について紹介していて、中でも「続修正倉院古文書 第四十九巻」の写経所やそこで働く人などに宛てた書状を集めたものが興味深かった。例えば欠勤する理由として「今朝漸腹張終及下痢雖加救治猶無止息（今朝から腹がはって下痢に及び、治療しても止まりません）」とあり、その字は慌てて書いたような筆跡で切実さが伺える、と解説している。非常に生々しい資料で、千三百年も時を経ているのに、当時の人たちの暮らしぶりが働きぶりがぐっと身近に感じられた。残そうと思って残ったものではなく、「たまたま遺ってしまった宝物」と言われる類のもので、「今でいうラインみたいなもの」と番組では言っていたが、ラインには筆跡がないよな、と思った。

最近手書きの字を見ることが少なく、手紙を出す人も少なくなっている。昨年十月、郵便（普通扱い）の土曜日配達休止が決まった。段階的に翌日配達も無くす。手紙に代わって急激に普及したメール。今はほとんどの人がメールを使ってやり取りをする。手紙を書かない人は多いだろうが、メ

ールをしない人は少ないだろう。メール（mail）というくらいだし、マークは大体封筒の形をしているが、本当に手紙（葉書を含む）はメールへ代替可能なのだろうか。また、歌に詠まれる手紙、メールは、それぞれ代替可能なのか、歌人ほどのように詠んでいるのか、そのあたりを探ってみたい。

まっすぐにわれをめぐしてたどり来し鉏路
の葉書雨にぬれたり 岡部桂一郎『戸塚閑吟集』

へたくそな俺の葉書の字と出逢う昔もいま
も雲のような字だ 佐佐木幸綱『天馬』

教へ子のくれし手紙の「メ」見つつ小さな
茗荷ほどのときめき 高野公彦『渾円球』

手紙ならではの歌を挙げた。一首目、遠い鉏路から来た葉書が雨に濡れている。上句からは葉書を書いた人が葉書となってやってきたような迫力がある。二首目、自分の字のことを詠む。自嘲している口語と（雲のような字）という比喩が的確である。三首目、ポストに來た手紙を裏返して誰から來たのか確認して、「メ」を歌にしている。（茗荷ほどの）という比喩から、まだ読んでいない手紙への期待を感じる。また、手紙は出した人が亡くなった後も手元に残る。

古手紙整理してをり亡きひとの手紙はことにしじみとして
上田三四二『照徑以後』

戦場からのハガキ一枚写真二葉父につながる記憶のすべて
田村広志『旅の方位図』

一通の母の遺品の封書にて足立某氏に出されずにあり
沖ななも『短歌』令3・6

一首目、読者の共感を呼ぶ歌。亡き人からの手紙は捨てられないと思う。二首目、戦場からの葉書は、検閲があつたり郵便事情が悪かつたり幾人もの手を通り、やっと家族のもとに届く。(記憶のすべて)であるから、葉書に書かれた父の筆跡は貴重で大切なものだ。三首目、母の字で書かれた宛先がリアルだ。物として残り、手に取ることができるのは思ひ出の品として価値がある。

海越えて届いたはがきの宛先の「南」というその番地にさわる 山崎聡子『手のひらの花火』
礼状を妻は書きおり文鳥を手に乗せ餌を与えるように
藤島秀憲『ミステリー』

のぶつなのたからのひとつ 宣長へははが節
酒をとくながき書簡 佐佐木幸綱『春のテオドール』

一首目、葉書をくれた人と思うと同時にその葉書が届くまでの時間、距離、空間(景色)などに思いを馳せる作者がいる。「南」という字は長旅に少し滲んでいたかもしれない。

二首目、考えを巡らせて丁寧に、慎ましく礼状を書く人が想像できる。その時間を詠んでいて比喩が可愛らしい。三首目、祖父の信綱の宝は、本居宣長にその母が書いた手紙だという。

その手紙が経てきた長い時間と思う。

次にメールの歌を見てみよう。

突然の死はわれに来よそののちもメールはつもる受信トレイに
藤島秀憲『ミステリー』

これは作者自身の死後に来るメールの歌。受け取る側としての歌で、メールは人の死を無視して機械的に、即物的に送られるということを詠んだ怖い歌である。

メール来たけれどきみからではなくて無印良品からメール来た 白川ユウコ『乙女ノ本懐』
ひとりみた夕焼けきれいすぎたから今日はメールを見ないで眠る 小島なお『乱反射』

宛名のみ変へて送られ来るメール定型にして過不足あらず
田村元『昼の月』

一首目がまさに企業からのメール。広告なのか、(ご注文の商品が入荷いたしました)というお知らせかはわからない。作者が待っていたのは(きみから)のメールであり、その落胆が(メール来た)という乾いたリフレインによく現れている。(無印良品)という固有名詞も効果的である。二首目、夕焼けとメールの対比がわかりやすい。夕焼けに心動かされ満たされた後、メールなんて見たくないのだ。それは(ひとり)と(他者との対話)という対比でもある。また誰のメールというわけではなく、メールという媒体に接してしまうと、蕪雑な現実引き戻されてしまう感じなのかもしれない。三首目、これは一斉メールでは失礼なので、宛名は変えているけれど文面はみな同じだろうという、全く気持ちが籠っている

ないのが透けて見えてしまうメールを詠む。

メールは手紙と違い、どんな長い文面でも瞬時に、しかも大勢の人に簡単に送ることができる。そこに情感はない、のかもしれない。しかし、たった一人のために、考え、想いを込めて出すメールもある。

奥尻島青苗地区の友達へメール これにはさ
みどりの鳩 北山あさひ『崖にて』

今日は寒かったまったく秋でした メール
しようとおもってやめる する

永井祐『日本の中でたのしく暮らす』

最終回の出たるその日に届きたるメール二
行はわれを泣かしむ 永田和宏『短歌』令3・8

一首目は、小題〈報道部にて〉の一連の中の歌で、東日本大震災のときの歌とわかる。奥尻島は一九九三年の北海道南西沖地震で火災や津波の被害に遭った。友だちの住んでいる場所を思い、メールを鳩に喻えているところから、手紙の感覚でメールを送っているのだろう、そこに温かい体温がある。二首目は上句がメールの内容と思われる。何とはない内容のメールを送ろうかどうしようかと悩んでいる。相手は大切に思う相手だろうか。(おもってやめる する)がリアルで面白い。永井にはメールを詠んだ歌が多い。日常のメールを詠み、特別な意味を持たせていない。三首目は〈三枝昂之からメール〉という詞書があり、「聶く」という連作二十八首の中の一首。別の歌の詞書に〈新潮社「波」に、河野裕子との出会いののちの放浪の記、不様な青春の日々を連載、一年半

に及ぶ〉とある。この歌はその連載の最終回が載った日に、三枝昂之よりメールが来た、という歌だ。(その日)というのが要だと思う。そこに手紙には為しえない感動がある。しかも二行という簡潔さもメールならではのだろう。

「欲しいものないか」と子らのメールきて父
の日の朝「ない」と応える 小高賢『眼中のひと』

サ高住なんて略語はよくないとメール送れ
ば「り」と返り来ぬ 桑原正紀『短歌研究』令2・4

一首目、何とも素っ気ないやり取りである。どこか電報を想起させる。父親との親子メールはこんな風に簡潔なことが多いのだろうか。メールは事務連絡的な役割としてある。この歌だけでは作者の感情はわからないが、「ない」だけの返事だとしても、そこに子から来たメールへの嬉しさがわからないではないだろう。二首目、〈サ高住〉とは〈サービス付き高齢者向け住宅〉の略語だ。作者は誰に対してメールを送ったのだろう。(り)は(りょうかい)の略語。落語の落ちのような歌だ。(略語はよくない)と言われつつもやはりメールだとなるべく短く簡潔に、という頭が働くのだろう。

ほほゑみを示す顔文字とどきあつ鼻のあたりで改行されて
光森裕樹『鈴を産むひばり』

友達と交わすメールの顔文字は怯えてばかり
あのととき死なず 北山あさひ『崖にて』

顔文字とは、記号や文字で作成された書き手の感情を表す顔の表情マークのことだ。メールだと感情が伝わりにくい、という問題を解決すべく顔文字を使う人は多い。一首目の顔

文字は鼻のところで行換ええされてしまっているところを詠む。受け取ったのは〈ほほゑみ〉であるけれど、それが割れていることで作者の僅かな齟齬感が伝わる。二首目、この歌も前出した歌と同じく地震のときの歌。〈こわいね〉とメールし合つて恐怖を乗り越えたことがわかる。限られた技術で人は自分の気持ちを相手に届けようとする。

それで思い出すのは向田邦子のエッセイ『眠る盃』に出てくる「字のない葉書」だ。戦争時代、向田の小さな妹が疎開するとき、父は字の書けない妹に、「元気なときは大きな○を書くように」と、たくさんの葉書を渡した。しかし、赤鉛筆の大きな○がついた葉書は、すぐに黒鉛筆の小さな○になり、遂に×になる。字ではないが○と×のその書き方で、すぐに家族は妹の様子を察して迎えに行く。メールのように端的であるが、手書きだからこそ気持ちが伝わったのだ。

手紙とメールは代替不可能と考えると、比喩の歌がよりわかりやすいだろう。

塩パンを食べつつおもふ風の音の^ととほい手紙のやうなみどりご 小島ゆかり 『六六魚』

春の風は芯寒きかな人の死を知らずメールが飛んでるやうな 高野公彦 『河骨川』

手紙、メールの比喩の歌をそれぞれ抽いた。一首目、この歌の前に〈ありふれたしかし未知なる人生の 下の娘が母になる夏〉という歌がある。未だ見ぬ孫を〈風の音のとほい手紙〉と喩えたところに期待と不安の何とも言えぬ心境がある。二首目、春の寒い風を、重たい〈人の死〉を軽々と知らせる

メールに喩えている。一首目は〈手紙〉、二首目は〈メール〉でなくてはならない。最後に次の歌を抽く。

バスデイカードをひらくひとときに向日

葵畑から風が吹く 笹井宏之 『てんとろり』

八月生まれの作者。〈南風のようなひと〉という詞書がある。向日葵畑の描かれたバスデイカードを読んでいるところを想像した。少し固めの紙でできたカードから、温かな夏の風が吹いて、作者の髪やカードを揺らす。しかし、改めてこの歌を読んでもみると、〈バスデイカード〉だけでは、デジタル（メール）のカードと解釈することもできる。メールを読むときは手紙と同じで〈開く〉という。今後こういう、実際に触れることができる紙なのか、デジタルなのかわからない歌も増えていくのではないか。

今回、メールを中心に手紙と比べて考察してみたが、今や交流手段は、メール以外にもラインやツイッター、インスタグラム、ビデオ通話など多岐に渡っている。手紙と比べるには機能が大きく違うので、ここではメールのみとした。

手紙、メールを読んだときの感覚は、相手へ届くまでの速度と比例している気がする。メールは瞬間のやりとりを楽しむ。〈今〉の温度を大切にしたい手段である。手紙は深くじわじわと味わう。また、長く時間をかけて書いた文章は、手紙をもらった側の立場に立つて読み直すことで、自分の主張の間違いや違和にも気づくことができる。

手紙とメールにそれぞれの役割があり、歌に詠まれた場合でも代替不可能な歌に秀歌が多い。